

〈私〉で語る自己

―戦時下の太宰治作品における自己演出―

文化創造専攻 国文学専修

二二〇〇三AJM 植村日向

修士論文要旨

太宰治の戦時下の作品はこれまで、国家へ迎合しているか否かという観点において多く論じられてきた。太宰の得意とする〈私語り〉の形式が、太宰自身の戦争への態度をも示唆するものとして機能していたためであろう。本論文は、従来の国家迎合／抵抗の問題についての議論は留保し、戦時下の太宰治が自身の〈私語り〉の作品のなかで、いかなる自己を演出していたかについて検討するものである。

第一章では、「鷗」（『知性』一九四〇・一）において田中英光「なべ鶴」（『若草』一九三九・五）を批判する〈私〉に注目し、同時代の文壇状況も視野に入れたうえで、日中戦争下の〈私〉像について検討した。「なべ鶴」批判の裏側で当時の検閲制度を批判し、終戦を待つ姿勢を固めた〈私〉のすがたを見出した。

第二章では、「新郎」（『新潮』一九四二・一）と「十二月八日」

（『婦人公論』一九四二・二）を並置して扱い、太平洋戦争開戦に際し、自らを語る〈私〉像と主婦や他者に語られる〈私〉像について比較・検討した。「新郎」と「十二月八日」の共通点をふまえ、太平洋戦争開戦の報を受け、無邪気に振る舞いながらもそうした自己を批判し、迫る死を思う〈私〉像を明らかにした。また、これまで指摘されることのなかった「新郎」における親鸞の和歌との関連性についても論じた。

第三章では、「散華」（『新若人』一九四四・三）を扱い、年少の友人の死を語るなかで創り上げる年長者としての〈私〉像に注目した。年少の友人の病死・戦死をきっかけに、自己の戦時下における文学的態度を確立しようとする〈私〉のエゴイステイックな面を指摘した。終章では、終戦後の地点から戦時下について振り返る「十五年間」（『文化展望』一九四六・四）という短篇を扱い、太宰が自身の過去のエピソードの書き換えをおこなっていることを指摘した。そうした書き換えという行為は本論で扱ってきた「鷗」、「新郎」、「散華」などの作品にも看取できるものであった。太宰は手の込んだ表現機構を自作に張り巡らせることで、戦時下の自己をいかようにも読めるよう、巧みに演出していたのである。